Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-04

小野市立好古館との連携事業について（自治体・地域住民と連携した新たな自治体史編纂や地域歴史博物館形成事業）

人見，佐知子

(Citation)
歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業,4(平成17年度事業報告書):64-66

(Issue Date)
2006-03-31

(Resource Type)
report part

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002225

小野市立好古館との連携事業について

好古館との連携の経緯

平成十七年（二〇〇五）一月二十六日、小野市と神戸大学は社会文化に関わる連携事業をすすめるための包括協定を結んだ。神戸大学と小野市は、奥村弘文学部助教授（日本史）、大津留厚神戸大学文学部教授（西洋史）を中心に『小野市史』の編纂に協力したほか、小野市・加西市にまたがる青野ヶ原にもうけられた「青野ヶ原俘虜収容所」（第一次世界大戦時にオーストリア兵の捕虜を収容していた施設）の共同研究を行うなど、かねてから連携を進めていた。包括協定は十年以上にわたる従来からのこうした取り組みをさらに発展させることを目指すものである。

協定にもとづいて今年度はセンターとして、今年度小野市立好古館特別展「青野原俘虜収容所の世界～河合地区の近世・近代から現代～」の開催に協力し、好古館と共同で企画・制作を行いました。具体的には、研究・教育機関としての大学の特性を活かした取り組みとして、大きくわけて三つの分野で協力した。一つめは、地域づくりの核となる歴史文化を形成する試みとして河合地区の「歴史調べ」に協力したである（ｉ）。二つめは、研究機関としての大学のこれまでの蓄積を踏まえ青野原俘虜収容所を中心とする研究調査を行い、その成果をもとに音楽会や講演会を開催したことである（ii）。三つめは、地域の歴史文化を担う人材育成の試みとして好古館で博物館実習（学芸員資格取得のためのインターンシップ）を実施したことである（iii）。以下、それぞれについて、若干の評価を交えながら活動内容を概観する。

活動内容

ｉ　「地域展」について

好古館の特別展の展示は、大きく二つに分かれる。青野原俘虜収容所について専門的な研究成果を展示する部門と、青野原俘虜収容所に隣接する河合地区北部の小・中学生が調べた河合地区の「歴史調べ」を展示する「地域展」部門である。後者の「地域展」は、地域の小・中学生が、地元の自治会、老人会、婦人会、ＰＴＡ、学校の協力によって、町の由来や伝承、年中行事、公民館や小学校の変遷、町内のお堂や神社、ため池、屋号などについて「聞き取り」に重点をおいた調査を行い、その成果を作品に仕上げて好古館で展示するというものである。センターの研究員もこの「歴史調べ」に協力し、調査方法や内容などについて助言を行った。

この「歴史調べ」の意義の第一は、子供達が自分たちの地域の成り立ちを知り、地域に関心をもつようになり、あるいは地域の文化を受け継ぐ人材の育成が期待できるということである。あとで触れるように、地域の歴史文化の保存・活用には、地域のなかにそれを担いうる人材が存在することが重要な要件であり、「歴史調べ」はそうした人材の養成に応えようとするものである。

第二は、調査の過程で自治会、老人会、子供会、学校など世代を越えたさまざまな住民同士の交流が生まれ、従来必ずしも連携していなかった組織に接点が生じたということである。これは、地域のコミュニティの再生や新たな住民相互の関係の構築という点で意義がある。

第三は、自分たちの調査の成果が展示されるということで好古館へ足を運ぶ人が増え、市民にとって地元の博物館がより身近な存在になる得ることである。実際この特別展の入場者数は二七三〇

人で、好古館開館以来の最高動員数を記録した。

第四は、学術的な成果として、現在が現代史研究にとって高度経済成長期以前の社会のあり方を聞き取る最後の機会であるということである。聞き取り調査の過程で、高度経済成長期に人々の生活という点で巨大な構造転換がありそれをはさんで暮らしのあり方が激変したこと、そして高度成長期以前の経験が世代間で分断されて実感として現在継承されていないという事態が改めて認識された。

ii　研究活動

主なものは次の三つである。まず、青野原俘虜収容所についての学術的調査の実施である。これは、加西市教育委員会、加西市史編纂室など近隣自治体の協力も得て、現地の遺構調査、史料収集、聞き取り調査などを実施した。

次に、「ふるさとをしのぶ音楽会～青野原俘虜収容所音楽会の復元」の開催（二〇〇五年十月十日、於小野市うるおい交流館エクラ）である。これは、青野原俘虜収容所内で行われた慈善音楽会の模様を、八六年の歳月を経て、神戸大学交響楽団（指揮＝田村文生神戸大学発達科学部助教授）の協力で復元したものである。音楽会では、演奏会に先立ち、大津留厚神戸大学文学部教授が音楽会の主旨を述べ、さらに演奏会開催のきっかけとなった史料（一九一九年三月三十日に青野原俘虜収容所内で行われた慈善演奏会のチラシ）をもとに俘虜収容所の概要を講演した。演奏会の曲目は、歌劇「レーヨン」序曲（A．トマ）、レヴリ（H．ヴェーダン）、ソルヴェイグの歌（劇音楽「ペールギュント」より）（E．H．グリーグ）、歌劇「ノルマ」序曲（V．ベッリーニ）、巡礼の合唱（歌劇「タンホイザー」より）（R．ワーグナー）、軍隊行進曲第一番（F．シューベルト）で、主に十九世紀半ばのヨーロッパで活躍した作曲家たちで、最近ではあまり聞かれない名前も含まれている。それぞれの曲目については演奏前に長野順子神戸大学文学教授が曲解説をつけた。これらは大半がオーケストラ曲や伴奏つきのソロ作品であるが、おそらく軍楽隊の形で演奏されただろうことから、それぞれ小編成の吹奏楽向けに田村助教授と発達科学部の学生が編曲を試みた（音楽会パンフレットより）。

最後は、講演会「青野原俘虜収容所の世界」の開催である（二〇〇五年十一月五日、於小野高校百年記念館）。これは、長年の研究成果を市民の方々に報告する初めての機会となった。報告は、藤原龍雄夢前中学校長（元姫路市史編纂委員）による「第一次世界大戦と姫路捕虜収容所～捕虜の生活とその遺物～」、岸本肇神戸大学発達科学部教授（スポーツ史）による「青野原俘虜収容所捕虜兵のスポーツ活動」、福島幸宏京都府立総合資料館職員（日本近代史、元小野市史執筆委員）による「俘虜を取るということ～第一次大戦期の俘虜政策と青野原収容所」の三本で、第一次世界大戦期の捕虜に対する日本社会の対応の歴史的特質や、青野原俘虜収容所に収容されたオーストリア兵たちと地元住民の交流のようすなどについて、現在までの研究の到達点と今後の研究の可能性を示した。つづく討論は青野原俘虜収容所研究の現状と課題を市民と共有する貴重な場となった。

青野原俘虜収容所の学術的調査は、来年度以降も加西市・滝野町など近隣の自治体とも協力しながら継続される予定である。

iii　教育活動

今年度の特別展の制作には、博物館実習として神戸大学文学部の学生が参加した。従来の博物館実習の形態とは異なり、数日間連続して実習を実施することはせず、「歴史調べ」、特別展開会式、音楽会、講演会の運営補助など、特別展の準備から運営までの一連の制作過程を経験してもらった。これは、博物館の展示ができるまでや運営の実態を知るという意味で非常に実践的な実習となった。

また、「歴史調べ」への参加は、地域の人々と共同で調査研究を行い、それを地域づくりに活かしていく方法をともに考えるという意味で重要であった。なぜなら、今年度の博物館実習は、地域に生きる市民として、地域の歴史文化を支える人材を育成することをひとつの目的としていたからである。

これまでセンターの事業を進めていくなかで実感されたのは、専門職としての学芸員に加え、地域の歴史文化に関心を持ちそれを支える市民の存在が、連携事業の成否を分けるということであった。その認識にたち、文部科学省の「平成十六年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム」（現代的教育ニーズＧＰ）の地域活性化への支援分野で「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダー養成」を申請し採択された。これは、歴史文化を活用し新たな地域づくりに資する人材（地域リーダー）の育成をめざすもので、これをうけてセンターは、平成十六年度から三カ年計画で地域歴史遺産の活用を図る地域リーダー養成のための教育プログラムの開発を、県内各地の自治体等と連携して進めることとなった。好古館での博物館実習は、このプログラム開発の一環として行われたものである。今年度は、初年度ということもあり試験的な性格もあったが、来年度以降より具体的・体系的に歴史系博物館実習のプログラム提示を目指すものである。

また、「地域歴史遺産保全活用基礎論」（「日本地域文化論特殊研究」）には、大村敬通小野市立好古館館長を講師として招き、地域における歴史系博物館の役割について講義していただいた。

おわりに

以上、今年度のセンターと好古館の連携事業を概観してきた。この事業は今後少なくとも二年間は継続される予定である。以上は成果を中心に述べてきたが、最後に今年度の活動を総括し来年度の活動の課題として、地域展における「調べ学習」について言及したい。「調べ学習」は、来年度以降の好古館特別展の目玉のひとつであるとともに、地域における博物館活動および大学と地域の歴史遺産を活用した地域づくりにとって以下に述べるように重要な位置を占めるものであるからである。

今年度の好古館とセンターの連携事業の総括会議において、最も問題となった点のひとつは、「調べ学習」が、聞き取りを中心とした方法で小・中学生の関心を優先して進められるために、現在の方法ではその内容において学術的に十分な深まりを得ることが困難ではないかという点である。

一方で、地域の歴史を次世代に伝えたいという地域社会の要求は決して小さいものではないことは「調べ学習」における地元の方々との関わりのなかで実感されたものであり、この思いを博物館や大学がどのように展開させるかということが課題となるだろうことが認識された。

その方法については、いまここで十分に提示できる準備はなく、来年度以降の実践において模索していくしかないのであるが、「調べ学習」で子どもが調べた内容について裏付け史料を提示したりその解説を行い、歴史文化についての学術的な理解を共有していくという地道な活動が必要であろう。地域歴史遺産を活かした地域づくりをが単なる企画に終止させることなく、深まりと広がりをもつためにその活動を継続的なものとしていくことも今後の課題となるだろう。

また、これは地域における博物館の役割や意義を地域社会に普及していくという意味でも重要である。好古館の所収する史料について地元と情報を共有することによって、博物館活動への理解を深めることになるだろうからである。

特別展の開催を契機として、青野原俘虜収容所についての新たな史料や情報を得たり、オーストリアとの姉妹都市提携を計画するなど新たな展開もみせている。地域の博物館活動が地域を活性化し新しい地域づくりの一助となることが期待される。

（文責・人見佐知子）